

**1970年代西ドイツの批判的教育学(kritische Erziehungswissenschaft)
の学習指導案に関する一考察**

中 野 和 光

美作大学・美作大学短期大学部紀要（通巻第54号抜刷）

論 文

1970年代西ドイツの批判的教育学 (kritische Erziehungswissenschaft) の学習指導案に関する一考察

A Consideration on the Lesson Plan of Critical Pedagogy (kritische Erziehungswissenschaft)
in West Germany in the 1970's

中野和光

キーワード：批判的教育学、批判的リテラシー、解放的教育学、学習指導案、解放

1. 研究の目的

オーストラリアのカリキュラム研究者グリーン Bill Green は、これからの若者に必要な学力として、読み書き能力、コンテンツ・リテラシー、批判的リテラシーをあげている¹⁾。批判的リテラシーにはさまざまな定義がある。たとえば、マクドナルド G.A. McDonald は、批判的リテラシーとは、「通常の意味の読み書き能力の概念を越えて、自己あるいは世界についての批判的思考、問い、変容を組み込むこと²⁾」と定義している。ドーザー Cheryl Dozier らは、批判的な読み書き能力を持つようになるとは、「読み書き能力は、社会的行為のためにあるという感覚、人々がいかに彼ら自身のために読み書き能力を用いるかの自覚、自分自身が読み書きの主体であること、の感覚、の形成することである³⁾」と述べている。ランクシャー Colin Lankshear は、批判的リテラシーは、「従属的な他者、周辺化された他者の解放と活性化」と関連した場合のみの得ている⁴⁾、と述べている。筆者自身は、一定の社会的背景と文脈の中で目的を持って生み出されたものであるという視点からテキストを読解し、作成する能力の意味で使っている。

批判的リテラシーの「批判的」という概念の起源は、マクドナルドが述べているように、(ハーバーマ

スらに代表される) フランクフルト学派の批判理論にまでさかのぼる⁵⁾。ランクシャーも、批判的リテラシーの背景の一つとして、西ドイツのハーバーマス Jürgen Habermas の知識理論をあげている。それによれば、知識には、技術的知識、実践的知識、解放的知識があるが、技術的知識は、今日他の二つの知識を従属させている。解放的知識は、他の二つの適正な行使のために必要である⁶⁾。ハーバーマスは、このような理論にもとづいて、言語は、イデオロギー的に歪曲されやすいが、話し手同士の相互性と自律性によって特徴付けられる理想的な会話の状況を通して、人々が、コミュニケーションの「ゆがめられた」形態と「ゆがめられていない」形態を区別し、解放的関心の中で行為するようになることを主張する⁷⁾。ハーバーマスのこの理論は、1960年代末から1970年代初めにかけて勃興した批判的教育学ないし解放的教育学の基礎となった。

「解放 (Emanzipation)」という概念は、語源的には、父親の家族支配権力からの息子の解放という法律的行为という意味である⁸⁾。教育学の中では、19世紀に使われ始めている。19世紀における意味は、「人類の自己解放の歴史的プロジェクト」である⁹⁾。

1965年ごろ、「解放」という概念が、教育学の文献に現れた¹⁰⁾。とりわけ、1960年代末から1970年代に

かけて勃興した批判的教育学ないし解放的教育学の場合、「解放」とは、次の二つの意味で用いられた。

1. 抑圧された、恵まれない、雇用された個人や集団の解放
2. (個人の生成発展に関して) 教育の最終目的としての成熟の方向への教育的に支持された一歩一歩の学習過程¹¹⁾

長谷川榮は、批判的教授学は、授業の目標として「解放」を目指しているが、「目標は、『解放』の他に、『自己決定と共同決定』や『成熟性』のような概念を用いることもある。この場合、常に個人の主体性の確立と社会生活の民主化を念頭に置き、個人的解放と社会的解放の両方をさすのである¹²⁾」と述べている。

本論文は、批判的教育学ないし解放的教育学の「解放的前提の具体化¹³⁾」としてのその学習指導案が、具体的にどのように作成されていたかを明らかにすることを目的としている。

2. 批判的教育学(解放的教育学)の授業計画論(学習指導案)

文献は、次の二つを用いる。

Werner Raith hrsg., Handbuch zum Unterricht Modelle-emanzipatorischer Praxis- Hauptschule, Raith Verlag, 1973. (ハウプトシューレ用ハンドブック)

Rolf Tybl und Hellmuth Walter hrsg., Handbuch zum Unterricht Modelle- emanzipatorischer Praxis-Grundschule, Raith Verlag, 1973. (基礎学校用ハンドブック)

ドイツの学校制度は、第1学年から第4学年までが基礎学校(Grund Schule)である。中等学校は三分岐型である。ハウプトシューレは、第5学年から第9学年までの学校である。レアレスシューレは、第5学年から第10学年までである。ギムナジウムは、第5学年から第13学年までである。

この二冊のハンドブックのうち、基礎学校版の中で

解放的教授学について次のように説明されている。

1960年代の終わりから、教育学文献の中で、「解放的思考」が増え始めている。そのさい、自由、自己決定、成年、のような精神科学的な基本的目標設定が、社会的側面を取り入れるということの下で議論されている¹⁴⁾。

解放的教授学¹⁵⁾における解放概念については、次のように説明されている。

1. 解放のためには、個々の解放的意思と能力が要求される。このような個人的模範は、全体社会における行為への置き換えがなかったら見せ掛けに終わってしまう。
2. 教師にとって、解放的行為とは、
 - a) 制度的な学校の強制力からできるだけ子どもを遠ざけること
 - b) さらにこのことは次のことを意味する。
伝達する内容を生徒の客観的興味に方向づける
その内容を本来の社会的政治的状况、それを変革する真の可能性を洞察できるようにする。
 - c) 第3に、解放的授業は、学校の内外において、民主化を受容する準備を要求する¹⁶⁾。

解放的教授学の授業の目標、内容、形態について、ワルター Helmuth Walter は、次のように説明している。

1. 授業目標

- ① 能力を批判的なやり方で学習する。
- ② 新しい状況と問題への柔軟な知的な応用
- ③ 個々人がすでに持っている多数の経験を自由に創造的に役立てる問題克服の形態の促進
- ④ 問題克服の際に他の人間と共同的効果的に協力する態度
- ⑤ 習得した能力の社会的実践への意味を反省する態度の形成と行動の準備
- ⑥ 社会的経験に合致して自主的に内容を設定する能力の形成
- ⑦ 外から決定された社会的条件の変革にふさわしい行動モデルの形成

2. 授業内容

- ① 所与のカリキュラムの中から、生徒に対して、外からの決定のメカニズムを発見することに適した内容領域の選択
- ② 社会的政治的に意味のある内容の優先的な選択（以下略）

3. 授業形態

- ① 生徒活動の重視、教師の活動の縮小
- ② 統制的な教師の活動の放棄
- ③ 生産的な学習活動の重視、再生的学習活動の縮小
- ④ 拡散的な解決の探求の重視
- ⑤ 社会的活動形態の重視
- ⑥ 生徒による批判が挑発され促進される
- ⑦ 無茶な成績競争の放棄¹⁷⁾

実際の授業計画（学習指導案）について検討してみよう。

この2冊のハンドブックで扱われている教科は、次のとおりである。

基礎学校：ドイツ語、地理、歴史、芸術、数学、音楽、理科（生物学）、理科（物理・化学）、宗教、性、社会－経済学、スポーツ

ハウプトシューレ：労働、英語、地理、歴史、ドイツ語、芸術、体育、数学、音楽、理科（生物学）、理科（物理・化学）、宗教、社会科

ここでは、基礎学校の理科（物理、化学）、音楽、スポーツ、ハウプトシューレの社会科の学習指導案を検討してみたい。

(1) 基礎学校・理科（物理、化学）の学習指導案¹⁸⁾ 基礎学校第1学年理科「物質の状態の変化」の単元

[伝統的授業]

学習目標

水は一定の温度でこおり、また、とけると述べることができる。

：水は一定の状態にある。

授業の意図

事実的知識の最大限の達成、最小限の短い時間とわずかの手段を用いて

方法

演示

教師による説明（時にメディアを用いて）

[解放的授業]

学習目標

伝統的授業と同じだが、授業の意図とはより狭く結合している。

日常的現象は、ひとつの説明を求める。

問題は次のように定式化される。

「一定の水の結晶はなぜできるのか」

ひとつの説明の可能性が追求される。

「雪はそれ自体は雨のようなもので冷たいだけだ。」

方法

観察、探究計画、生徒自身による探究を行う。

検証

仮説の検証

このような状態の変化は、他の物質でもあるかどうかの検証

一般的な法則を導き出す。

物質は、一定の温度のもとでは、同じ物質でありながら、他の状態に変化する

この学習指導案を見ると、伝統的授業が、教師による演示、説明に終始しているのに対し、解放的授業は、生徒による探究活動を重視している。その意味では、解放的授業といっても教師中心の授業の代替案以上のものではない。

(2) ハウプトシューレ社会科の学習指導案¹⁹⁾

ハウプトシューレ第8学年社会科「アパート」

1時間目

テーマ「アパート」

- 目標： a) (新築の) アパートのありうる葛藤
 b) アパートの通常の欠陥、不足
 c) その原因

授業過程

1. 指摘

- a) 発問：アパートに住んでいる生徒は何人いるか (古い、新築)
 b) 言語的刺激：問題、アパート (とりわけ新築) の困難

2. 最初の局面

- a) 葛藤の場面、問題を生徒が述べる
 b) 生徒が述べたことの重要なキーワードを板書する。

3. 問題設定

二つの典型的なタイプのアパートの概要 (平面図) をOHPを使って説明する。

4. 第2の報告の局面

- a) 二つの間取り図をめぐって会話
 子ども部屋がない
 子ども部屋が小さい
 寝室は大きい
 大人のためには比較的場所がある
 ひっくるめて住居が小さい
 b) 教える会話
 原因
 小さい住居一家賃が高い
 住居の計画や間取りのときの子どもに対する考え方
 安っぽい建て方-家主が得をするように
 住居は商品である

c) 討論

結論
 安くて広い住居
 堅固なつくり
 別の間取り

5. 結果の確認

- a) 板書による総括
 住居

1. 住居はほとんどの場合、偽って建てられる
 一部屋の広さはかつかつ
 一最も小さい部屋は子供用
 一最も広い部屋は寝室
 一音が筒抜け

2. 原因

- 一住居は、最大限、お金を稼ぐための商品
 一家賃があまりに高いので、ほとんどの家庭は小さな住居にしかすむことができない
 一間取りは子どものためではない
 一家主は、利益を上げるために安普請する

- b) 生徒は板書をノートに写す

2 時間目

テーマ：「アパート」

目標：次のことを認識する

- a) しばしばある借家人同士のトラブル
 b) 居住者心得の性格
 c) a と b の原因

授業過程

1. 導入：問題設定

- a) 前の時間との関係
 b) あらかじめ用意した板に描かれた絵を見せる
 トラブル
 1. 隣人と
 2. 階段室の中で
 3. 家の回り
 4. 両親と

2. : 経験の局面

- a) トラブルの場合の要約をひとつひとつ教師が話す
 b) 最初の三つの場合について、生徒たちに板書させる。

(1. ステレオの音、2. 自転車の保管、3. ボール遊び)

c) 両親とのトラブルと表札についてのトラブル
隣人への気遣いをあげ、入居人心得を考察させなければならない

3. 二つの報告へ向かわせる

a) 入居人心得の中の退去命令
b) 生徒はとりわけ下線を引いた部分を読む

4. 第2の報告の局面

a) 教師の話
—誰が入居人心得を作ったのか
—入居人心得の中で借家人はどのような役割を演じているか
—家主はいかなる役割を演じているか

b) 生徒による要約と板書
入居人心得
関係者の共同生活の形態を決めているのではなく、家主がそれを決めている。

c) トラブルとこのような入居者心得が成立する原因を報告する

d) 教師による要約と板書
原因
—空間の不足と迷惑な騒音が聞こえることが過剰な規則と禁止事項を生む
—過剰な気遣いで、人はその要求を十分に出し切れない
—所有は人に対する力を与える

5. 結果の確認

生徒は、入居者心得をそばにおいて、板書をノートに書き込む

この学習指導案は、借家人の立場で、アパートの問題を教材としている。「抑圧された、恵まれない、雇用された個人や集団の解放」を目指しているという意味で、典型的な「解放的授業」の学習指導案の例である。

(3) 基礎学校・音楽科の学習指導案²⁰⁾

基礎学校音楽「環境音」

学習目標

- さらさらという音の認識
- その識別学習
- それらの音の記述
- それらの音に気づく
- それらの音を目的に合わせて作り出す
- 最新の音楽を知る

補助手段

- 録音テープ
- 道路交通の絵
- 作業用の絵
- 共鳴箱
- 最新の音楽を聴く例

プロジェクトのスケッチ

教師：通学路で何を聞きますか

(代替案：遊び場、教室、家の中、建設現場、父親の職場)

生徒たちは、音のまねをしてそれらをあげる

(代替案：宿題として録音テープをとってきてそれらを聴く。)

いくつかの音を選び出される。(たとえば、自動車、路面電車、自転車)

そして正確に特徴付ける。

教師は道路交通の絵を見せる。

質問：この絵の中の乗り物と人間はどのような音を出しますか。

生徒たちは、そのつど、音とその発生源をいう。

教師：通りを通過する乗り物で遊びます。ひとりは交通を取り締まる警察官となります。

子どもたちはひとつにまとめることを提案する。

子どもたちは、音の記号を可能な限り自分たちで発見する。

その後、音の性質を言語化する。

教師：私たちは、何の音がなっているか書きます。

このように人は音に気づくことができます。

楽譜が助けを得て作成され、録音され、批判され、書き直される。

教師：私はここに一人の作曲家の楽譜を持っています。

これにしたがって何か表現できますか。

生徒は、考えたことを発表し、彼らの楽譜と比較する。

教師：この作曲家の音楽を聴いて見ます。

教師と生徒はこの音楽を聴いて討論する。

生徒は、次の乗物の音をシンボルで表現する。

オートバイ

歩行者

自転車の呼び鈴

パトカー

路面電車

警笛

この学習指導案を見ると、子どもたちが、環境音を聞いて、それを記号で表現し、音楽を作曲するというプロジェクトとして計画されている。環境音で音楽を作るという当時の「最新」の音楽に触れさせるという点では急進的であるが、社会変革に直接結びつくわけではない。

(4) 基礎学校・スポーツの学習指導案²¹⁾

教科固有の学習目標

練習教材、その組織化と過程、個々の運動の実現を通じた課題の具体化を知る

解放的学習目標

授業過程の中で、意識過程を設定し、能力を形成し、内容を反省し、討論し、根拠づけることに貢献する。

本質的目標は、授業における決定過程への参与である。

授業形態

一斉、ないし、討論、グループ学習

用具：運動の手引き

授業過程

1. 個々の練習を言葉と視覚で表現する。
2. 練習の段階の組み立て、練習グループの編成、各グループをあらかじめ用意された段階へ割り当てる。
3. 各段階の練習の実演
4. 練習開始。短い練習時間の後、次の段階へ移る。そして、全体の過程を終える。
5. 子どもたちは最も楽しかった段階を言う。
6. 子どもたちの選択を集約し、書かせる。
7. 教師による付け加え、討論、全体の過程の最終的確認

この学習指導案において、目標にあげられているように、子どもたちが決定過程に参加することが重んじられている。

3. 全体に対する考察

解放的教授学は、授業において社会批判的能力を育てる教授学であるとイメージが強い。実際に、学習指導案を検討してみると、社会科は明らかに「抑圧された個人や集団の解放」を目指している。理科は、探究活動を重視しており、スポーツは、子どもたちが決定過程に参加することを重んじている。ペンシュ Manford Bönsch は、解放的教授学を目指している授業の方法として、1.教師中心の授業の代替案、2.自由活動、3.自主学習の演出、4.プロジェクト志向、5.役割遊び、をあげている²²⁾。理科とスポーツは、社会批判というよりも、むしろ、教師中心の授業の代替案、自主学習の演出、を目指している。これらは、抑圧された、恵まれぬ、雇用された個人や集団の解放という第1の「解放」の意味ではなく、「教育の最終目的としての成熟の方向への教育的に支持された一步一步の学習過程」という第2の意味の「解放」を目指していると考えられる。

解放的教育学の学習指導案を検討してみたいことは、それらは、「抑圧された、恵まれない、雇用された個人や集団の解放」という意味と、「教育の最終目的としての成熟の方向への教育学的に支持された一歩一歩の学習過程」という二つの意味の「解放」を指して作成されているということである。

解放的教授学に対しては、今日、次のような批判がなされている。

ルーロフ Jörg Ruhloff は、次のように批判している。

解放と道徳性に意味における成熟との区別が飛び越えられている。依存性からのあいまいな自由と理性的な自己決定能力の間には区別がある。解放への関心を理論と実践を導く関心とみなすことは問題を実践家の具体的な動機付けの問題とする見誤りを侵している²³⁾。

ベーム Winfried Böhm は、解放というスローガンによって、党派的な意識改革をカムフラージュする危険性がある。未熟な主体を社会的諸関係と早すぎる結合を行う。教育学の誤った政治化を促進する。ベームは、このように批判しながらも、教育には、ハーバーマスが述べているような解放機能があることも認めている²⁴⁾。

自己決定、共同決定という教育目標に対しては、今日では、それらは、教育の最上の目標ではない、という批判がある²⁵⁾。

批判的リテラシーを育てる方法は、教育の目的の立て方も含めた検討が必要なことをこれらのことは示しているように思われる。

註

- 1) Bill Green, Subject-Specific Literacy and School Learning: a focus on writing(1988), in David Scott ed., Curriculum Studies, vol. IV, Routledge Falmer, 2003, p.12.
- 2) Gynthia A. McDaniel, Critical Literacy-A Way of Thinking, A Way of Life, Peter Lang, 2006, p.5.
- 3) Cheryl Dozier, Peter Johnson and Rebecca Rogers, Critical Literacy/Critical Teaching, Teachers College Press, 2006, p.18.

- 4) Colin Lankshear and Peter L. McLaren, Critical Literacy, State University of New York Press, 1993, p.xviii.
- 5) Gynthia A. McDaniel, op.cited, p.12.
- 6) Colin Lankshear and Peter L. McLaren, op. cited, pp.39-40.
- 7) J.J. Chambliss ed., Philosophy of Education; An Encyclopedia, Garland, 1996, pp.117-118.
- 8) Jürg Ruhloff: Emanzipation. In: Dietrich Benner und Jürgen Oelkers hrsg.; Historisches Wörterbuch der Pädagogik. Weinheim und Basel, Beltz, 2004.
- 9) a.a.O., S.
- 10) a.a.O., S.
- 11) Walter Horney usw., hrsg., Pädagogisches Lexikon, Erster Band, Reinhard Mohn, Bertelsmann Fachverlag, 1970.
- 12) 長谷川榮『教育方法学』協同出版 2008年 36ページ
- 13) Wolfgang Kolffgan Keckeisen: Kritische Erziehungswissenschaft. In: Dieter Lenzen und Klaus Mollenhauer hrsg.: Enzyklopädie Erziehungswissenschaft Band 1: Theorie und Grundbegriffe der Erziehung und Bildung. Stuttgart, Klett, 1995, S.130.
- 14) Rolf Tybl und Hellmuth Walter hrsg.: Handbuch zum Unterricht Modelle-, emanzipatorischer Praxis- Grundschule. Starnberg, Raith Verlag, 1973, S.10.
- 15) 教授学の定義は多様である。ケックら Peter Köck und Hanns Oftによれば、陶冶内容と教授計画の理論、教授学習の理論、授業の理論というとらえ方の類型がある。(Peter Köck und Hanns Oft: Wörterbuch für Erziehung und Unterricht. Donauwörth, Auer, 2002, S.135-136.)
解放的実践の授業モデルを提示した基礎学校とハウプトシューレのハンドブックでは、解放的教授学という概念を用いている。ハーバーマスの批判理論の影響を受けて勃興した教育学は、批判的教育学あるいは解放的教育学と呼ばれるが、ここでは、教授学習の理論を対象とする批判的教育学の意味でこれ以後は、解放的教授学の概念を用いる。
- 16) Handbuch, Grundschule, a.a.O., S.13-14.
- 17) Werner Raith hrsg.: Handbuch zum Unterricht Modelle-emanzipatorischer Praxis- Hauptschule. Starnberg, Raith Verlag, 1973, S.66-67.
- 18) Handbuch, Grundschule, a.a.O., S.387-390.
- 19) Handbuch, Hauptschule, a.a.O., S.516-520.
- 20) Handbuch, Grundschule, a.a.O., S.336-341.
- 21) Handbuch, Grundschule, a.a.O., S.497-502.

- 22) Manfred Bönsch: Ideen zu einer emanzipatorischen Didaktik. München, Ehrenwirth, 1978, S.86-132.
- 23) Jürg Ruhloff: Emanzipation, a.a.O., S.
- 24) Winfried Böhm: Wörterbuch der Pädagogik. Stuttgart, Kroener, 2000.
- 25) Christian Böhm: Evaluation der Pädagogik Wolfgang Klafkis. Hamburg, Verlag Dr.Kovac, 2008, S.55. 批判したのは、ビラー Karlheinz Biller(1996)である。